

秋時雨猫にみやげの朱のリボン 才美

鑑賞: 季語の秋時雨と時雨の使い分けは難しいが、本句では成功しているのではないか。猫はこの土産をどのように扱ったろうか。

山の芋こんがらかつて黄葉す ツル子

鑑賞: 互選で点の入った句ではあるが、山の芋も黄葉も秋の季語である。同季といても、どちらかの季語に集中して作句すべきではないか。自然薯の蔓や葉がこんがらって黄葉しているのは、句にするほどの新しい発見ではない。

退院のセーターくるぶしが軽い 才美

鑑賞: 「踝が軽い」に退院の嬉しさが出ている。家人は以心伝心でお気に入りのセーターを用意してくれた。上半分と下半分は全く関係のない別々の事象を言っているようであるが、「自分の足で歩いて退院出来る嬉しさ」に収斂している。良い俳句の作り方の見本である。

大水車山の秋声廻しをり 幸

鑑賞: 互選で点の入った句ではあるが、評者には「山の」と「廻る」が気になった。

祈る背を移る絵硝子秋入日 才美

鑑賞: 評者も点を入れた句である。言わんとするところが判るが、もう少しすっきりした表現はないのだろうか。

。「日が移る」という時間の経過を詠むのも俳句であるが、絵硝子を透過した秋入日が、祈りの人に当たっているその瞬間を詠むのも俳句である。

添削案: 絵硝子を透る祈りの秋入日

身の内のどこか魚跳ぬ今朝の冬 才美

鑑賞: 見の内のどこかに魚がいるとの把握は良い。

高齢の母より指令帰り花 友子

鑑賞: 六十歳、七十歳を越ようが越えまいと、母親にとって子供はいつまでも子供である。指令を受けた子は、若き日の母の姿を思い出し、今の母の指令を反芻しながら帰途についている。

添削案: 高齢の母の指令や帰り花

胃カメラの予約を入れしそぞろ寒 ツル子

鑑賞: 気持は十二分に判るが、「胃カメラの予約」と「そぞろ寒」では少し暗いイメージとなる。希望を入れたい。

添削: 胃カメラの予約を入れし石露の花

秋の暮れ同じ時刻に猫の来て ツル子

季語とする場合、送り仮名の「れ」は使わない。「来て」はしっかり止めた方が良い。

添削: 秋の暮同じ時刻に猫の来し

添削: 秋の暮時を違へて猫二匹

短日やだんだん怖き童唄 才美

添削: 童唄や童話は一般に子供への警告、寓意として「怖れ」を含んでいるので、「短日」、「だんだん怖き」とする誘導は、童唄の本質を説明していることになる。

添削: 短日や最後の章の童唄

繕ひをする物も無き夜長かな 弘子

鑑賞: 使い捨て文化の行き着くところ。

冬仕度探し物より始まりぬ

弘子

鑑賞: 実感。失せ物の決着を付けなければ、次のことは始められない。

喰いつきて離れぬ百足秋の闇 幸

百足は夏の季語である。

添削: 棲みつきて離れぬ夢や秋の闇

落葉して明るき道や歩の早し ヤエ子

添削: 明るみへ大き歩幅の落葉径

リス飛んで桜紅葉の鎌倉路 幸

添削: 栗鼠跳ねて桜紅葉の鎌倉路

落ちる柿小さき手の中ナイスキャッチ
ヤエ子

添削: 小さき子のナイスキャッチよ柿落つる

緊張の和服の母や七五三 友子

七五三と言えは母と子を詠むのは常道。視点を変えて、普段は子育てにきりきり舞いの妻が今日は和服姿。これを見ている夫の感謝の眼。「緊張」が少し硬い表現。

添削: ひさかたの和服の妻や七五三

赤い屋根透ける林の黄落期 弘子

添削: 黄落期林間透きし赤き屋根

帰国子の無事を祈りし布団干す ツル子

添削:今はもう国際線へ子の蒲団

稲の波遥か向かうの青き海 ヤエ子

鑑賞:叙景句としてはもう一つインパクトが欲しい。

七五三蝶ネクタイの甘えん坊 友子

添削:母呼べる蝶ネクタイや七五三

待つ人の元へせかるる初時雨 友子

添削:待つ人のあらば忙しき初時雨

猫の毛の模様モダンや杜鵑草 ヤエ子

添削:猫の毛のモダンアートや蔦紅葉

冬日和足の痛み忘れをり 友子

添削:冬日和足の痛みの薄らぎぬ

裸木の西の空つくシルエット ツル子

添削:裸木のシルエットと西空の関係が不明ながら、

添削:裸木の影の源流西へ西へ

宿坊の小暗き廊下暮の秋 弘子

明暗の対比をつける。

添削:宿坊の廊下小暗し櫺紅葉

柿落葉どの一枚も捨てられず 弘子

柿落葉が綺麗なものは万人の思うこと。そのため、いくら柿の葉のことを詠んでも佳句にならない。葉への執着を止めて関心を別のもの、例えば

「空」に向ける。

添削:柿落葉透けし青空ただひとつ

濁る川遡りゆく鴨三羽 ヤエ子

添削:濁り川遡りゆく鴨三羽

(不在投句 荒木ツル子、稲葉幸)

文責・増田幸